

プロ野球に学ぶ、組織の力を伸ばした男たち(第2回)

上田利治監督に見る、リーダーシップの神髄

2017.09.26

2017年7月、パ・リーグの歴史に燦然(さんぜん)と輝く名監督の1人、上田利治(うへだとしはる)氏が80年の人生に幕を下ろした。上田氏は1970～80年代に阪急ブレーブスの黄金時代を築いたことで知られている。

その半生を振り返ると、指導者として過ごした時間のほうが長いのが特徴だ。1959年、広島カープに入団するも、肩の故障を理由にわずか3年で現役を引退。そこから指導者人生がスタートし、20年の監督生活では通算1322勝(歴代7位)、日本シリーズ3連覇(史上4人)を果たした。また20年以上の監督人生で、一度も最下位を経験しなかった(史上3人)という安定感も名監督といわれる理由である。

上田監督のマネジメント術とはどんなものだったのか? 実はビジネスでも生かせるヒントに満ちあふれている。

上田氏が歩んだ「異なる」4つのキャリアステージ

上田氏の指導者としての足跡は、コーチや監督など4つのステージに分けられる。

- 24歳で日本プロ野球史上最年少の専任コーチに就任した広島時代
- 全盛期を迎えつつあったチームの監督に抜きされた阪急黄金時代
- 強豪でありながらマンネリを迎えつつあったチームで再び指揮を執った第2期阪急～オリックス時代
- 最下位に沈むチームの立て直しを任された日本ハムファイターズ時代

このように、上田氏は事情や目標が異なるチームで手腕を発揮して、勝ち星を重ねてきたのだ。ビジネスシーンに例えるならば――

- 広島時代＝経験豊富な年上の部下がそろそろ組織に就いた新任管理職
- 阪急黄金時代＝先代の跡を継いだ2代目経営者。もしくは、実績があり勢いもある企業や部署に招かれた若き管理職・経営者
- 第2期阪急～オリックス時代＝マンネリ化し成績が下降線をたどり始めた企業の管理職・経営者
- 日本ハム時代＝弱小企業の管理職・経営者

となるのではないか。それぞれの時代で、上田氏がどのように取り組んできたのかを振り返る。

“新任・実績なし”を逆手に取った指導方法… 続きを読む